

厚岸水鳥観察館だより
べかんべうし
別寒辺牛

●問い合わせ／水鳥観察館 ☎52-5988



野生物の生存率～オオハクチョウを例にして～

多産な生き物は主に魚類や昆虫に多く、特にマンボウは3億個の卵を産むことで有名です。鳥類では、小鳥のスズメは1回に5～6個の卵を産み、1シーズンに2回、暖かい地方だと3回産卵を繰り返します。

厚岸町にもやって来る大型鳥類の場合、オオワシ、オジロワシで2～3個、タンチョウで平均1.8個と、大型になるほど数が少なくなっていきます。これは哺乳類でもだいたい同じです。

ところがオオハクチョウは、他の大型鳥類と同じくらいの2羽を越す翼を持ち、体重は国内最大級の野鳥であるにもかかわらず、1回の産卵数が5～6個と多いのです。1シーズンに複数回産むわけではありませんが、スズメ並みの産卵数なのです。



ここで計算。大型ワシやタンチョウ、オオハクチョウの寿命は約20年程度といわれており、また産卵できるようになるまで5年前後はかかります。仮にオオハクチョウの平均寿命が20年とし、5歳から15年間で年間5個の卵を産卵し続けると仮定すると、75個(15年×5個)の卵が生まれることとなります。全てヒナにかえたととして、2羽から75羽が誕生。実に37.5倍に増える計算になります。

仮に親が寿命を全うするとして、2羽(2÷75×100=約2.7%)が生き残れば全体の数は維持できるのですが、75羽が全部生き残れば、全国オオハクチョウだらけになってしまいますね!

実際は、卵がふ化しなかったり、ふ化直後に天敵に食べられたり、渡りの途中で事故にあったりと、色々な要因で数が減ってきます。また、無事に

大人になっても病気や不慮の事故などでその数は減っていき、最終的に現在の数をおおよそ維持しているといった状態なのです。中でもまだ体力のない幼鳥の生存率は飛び抜けて低いのです。大ざっぱに1つがいから5羽生き残るとして、 $5 \div 75 \times 100 =$ 約6.7%の生存率。約2.7%よりはだいぶ増えましたが、 $100 - 6.7 =$ 約93.3%が死亡しているということになります。これをマンボウに当てはめるとふ化後の生存率は、限りなくゼロになってしまうことがよくわかりますね。

今季の冬は非常に寒かったですね! 11月からマイナス10度を下回り、年を明けたらマイナス20度前後が頻発。近年では平成12年から13年にかけての冬に似たような大寒波がやって来て、厚岸湖で越冬していた約千羽のオオハクチョウの10～20%(100～200羽)は寒さが原因で死亡しました。ただ、上記の生存率を考えるとオオハクチョウの種が絶滅するような大事件ではない、というわけです。

今季は、この通常の衰弱死に加えて、高病原性鳥インフルエンザの発生が6年ぶりに確認されました。これも過去から繰り返し起こっている自然現象です。

むしろこれだけ強い寒波の場合、他の肉食動物も同様に厳しい冬となり、オオワシやオジロワシにとっては、オオハクチョウの死体は絶好のえさとなるわけです。これは生き物のつながりのほんの一つの断面ですが、命がこうやってつながっているということがよくわかる一例です。でも不思議なのはオオワシ、オジロワシはなぜか鳥インフルエンザで死亡していません。太古からそういう食べ物を食べてきたせいなのでしょうか?

湿原などの学術研究に最高50万円を補助します

町では、原始の自然が残されている厚岸湖・別寒辺牛湿原の保護やウィズユース(賢明な利用)に必要な学術資料を得ようと、専門知識を持った大学生や研究者、自然愛好家などを支援する『学術研究奨励補助金制度』を設けています。

対象となるのは、厚岸湖・別寒辺牛湿原の自然科学分野の研究や自然環境と漁業資源・酪農問題の関連を明らかにする社会・人文科学分野の研究などで

す。上限は50万円で、交通費や宿泊費、車両・カー・船舶などの借上げ料を補助します。

●応募方法／交付要望書などに必要事項を記入して厚岸水鳥観察館(〒088-1140 厚岸町サンヌシ66番地)へ郵送または直接提出

●締め切り／3月31日(当日消印有効)

●交付要望書などの請求先・問い合わせ／水鳥観察館